



TITLE:

<批評・紹介> 羊頭窪 東亞考古學叢
刊乙種第三冊

AUTHOR(S):

澄田, 正一

CITATION:

澄田, 正一. <批評・紹介> 羊頭窪 東亞考古學叢刊乙種第三冊. 東洋史研
究 1943, 8(3): 192-193

ISSUE DATE:

1943-08-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138860>

RIGHT:

羊頭窪

東亞考古學叢刊
乙種第三冊昭和十八年三月 東亞考古學會發行
B.6判一六二頁圖版六〇 定價金貳拾五圓

この報告書の刊行を見て今更の様に東亞考古學會が過去十數年間にわたつて印した足跡の蓋し大であつたことを思ふのである。それは先驅的な調査により學界の新たな機運を常に創始したのは勿論であるが、と同時に或る時期に達してその提供した資料が再び検討されんとする時やはり基礎的なものを與へて呉れる報告を残したからである。この關東州旅順鳩灣に臨む羊頭窪貝塚の發掘されたのは同州内の貔子窩牧羊城址發掘に次いで昭和八年のことであつたが、止むを得ない事情のため發掘當事者に代つて「赤峰紅山後」を報告した水野氏が主として擔當執

筆されたものである。「赤峰紅山後」に見られたあの手際は、報告技術の型がこの報告書に示されてゐる。今注意すべき内容を舉げて見よう。

一、史前住居址として明かな石積構築壁が檢出されたのである。

二、有孔石劍、有孔石斧を主要な支那古代利器たる戈、鉞と關係せしめてその着裝の試論がなされてゐる。

三、獸骨片中より卜骨を檢出したことは黑陶或ひは殷墟遺物との關聯を物語る一つの資料を提供したものである。

四、全般的に羊頭窪の土器が東亞黑陶の系統に屬することを考究してゐる。

等の諸點である。就中州内の主なる史前土器が支那本土の黑陶に淵源することは今日何人も疑ひ得ない事實であるが、その關係を資料の不備にも拘らずよく追究された努力は本書の價值を大ならしめるものである。書中挿入された一葉の原色圖版は土器壁面並びに胎土の色調を示して効果的なものであるが、水野氏はかゝる色調に本づき羊頭窪の土器を三類に分類されてその間に於ける時期の移行を説かれてゐる。そして又州内各地の土器が大まかに言へば全てが類似したものであるが、又夫々に差異があつて時期の差異か地域の差異か判然しないと言はれる。

かゝる類似と差異が今日關東州史前研究の到達しそして達着した一つの問題なのである。従つて關東州の史前土器は夫々の遺跡に就いて性格が摘出されねばならぬ。この報告書はともかく

羊頭窪の遺物の性格をかなり明快に示して呉れてゐる。さうした夫々の性格の摘出と綜合とにより、夫々の基いた根源的な文化の性格―さきの類似の様相―を把握せしめるのみでなく、關東州のもつ地域性といふか固有性といふかさういふもの―さきの差異の現象を―明らかにするからである。關東州には黒陶のみではなく、櫛目文土器の波及があり彩陶の影響が認められる。かやうに文化の錯綜して傳播した地域には常に新來のものと固有のものとの特異な融合がなされる。換言するならば東亞史前文化研究の課題の緒が關東州の史前遺物に錯綜して見出されるのである。水野氏は州内の史前文化を綜合するに東亞全般の史前文化を概観することにより推測されてゐるが即ちさうした事情を物語るものであらう。

尙附録として直良氏の羊頭窪貝塚出土の鳥獸骨の報告、島田森兩氏の亮甲店附近望海堀の史前遺跡の調査報告、島村氏による大連濱町貝塚の記が載せられる。濱町或ひは望海堀の遺物が正規に資料として報告されたことをよろこぶものである。

〔澄田正一〕